

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】洪 琬伸 (ホン・ユンシン)

【所属】(助成決定時)早稲田大学アジア太平洋研究科

【研究題目】占領空間のなかの戦後意識の形成研究 —沖繩の米軍収容所体験分析を通して—

### 【研究の目的】

本研究は、第二次世界大戦の経験をめぐる日韓の反目の歴史を、「沖繩」という日韓関係の「周辺」とされてきた空間から考え直そうとする試みである。筆者は地域研究としての沖繩学を、日韓関係史のなかに位置づける必要があると考えてきた。それは、日韓関係におけるアジア太平洋戦争とその後の米軍占領史は、沖繩という空間、厳密に言えば 1945 年の沖繩戦を中心に歴史人類学の認識論的なアプローチを通して分析すると、より立体的にとらえられると考えるからである。このような問題認識から本研究では、沖繩戦における「収容所」という空間に注目している。それは沖繩占領と同時に米軍が設置した「収容所」という空間が、日本軍の「占領」を経験した人々が、米軍「占領」の中で戦後の生活を築いていく、「占領空間」と「解放空間」の連続性をもっとも具体的に見せてくれる空間であるためである。

### 【研究の内容・方法】

沖繩は日本で唯一米軍との地上戦を経験した場所である。同時に沖繩は日本軍捕虜及び沖繩の住民、朝鮮人等植民地から沖繩戦に動員された人々を収容する米軍収容所が置かれた唯一の地域でもある。1945 年 4 月 1 日上陸した米軍は沖繩の住民、軍人・軍属を次々と収容しはじめたが、沖繩戦が激しくなるにつれ増大、85%に相当する住民が収容された。

既存の研究で、沖繩の住民にとっての「戦後」とは、米軍が建てた「収容所」に入れられた時であるとされてきた。米軍の「難民収容所」に入れられて初めて住民は戦争の終結と「戦後」を実感した側面があるためである。しかし本研究で筆者は、「住民保護＝収容所」という図式がアイスバーグ作戦初期における離島の「収容所」では通用しないことを明らかにした。例えば早い段階で米軍が上陸し捕虜となった伊江島の住民は、沖繩で日本軍がまだ健在であった離島に派遣され、捕虜勧告の任務を負わされたため、日本軍の虐待を受けたのである。

沖繩における戦闘が最終段階に入るにつれ、各地域に「難民収容所」を建て、米軍による住民管理の体系化が始まった。本研究では、「難民収容所」「捕虜収容所」「引き上げ収容所」の 3 つに分類し、米軍の戦略によって移動させられた人々が経験した収容所のなかの生活に焦点を当てた。『ウルマ新報』と諮詢会の協議録を通して分析しながら、収容所のなかで戦後民主主義を芽生えさせた沖繩住民の生活像と、米軍政策との関係性を明らかにした。またこれらの民主主義の場としての「収容所」が反日感情が高まる場所でもあったことに注目した。沖繩の場合、捕虜になった日本兵の多くは沖繩出身者であった。そのため、日本兵と朝鮮人軍夫たちが収容された「嘉手納収容所」や「屋嘉収容所」の場合、朝鮮人軍夫たちによる日本兵に対する復讐事件が多発している。収容所はナショナリズムが現れる「空間」でもあり、また、戦前の日本に対する極めて高い反日感情が現れた場所でもあったためだ。朝鮮人・日本人・沖繩人の体験を、韓国と沖繩の住民の証言分析を通し立体的な分析したのは、本研究の独自のなものである。

### 【結論・考察】

収容所は確かに「住民を保護」した側面を持ち、沖繩における戦後民主主義がスタートした空間でもあった。しかし、実態は必ずしも「解放空間」ではなかった。先行研究において沖繩における「収容所」が住民の「解放空間」として描かれてきた理由には、沖繩戦における日本軍の虐待という事実と同時に、占領期における米軍資料が、「住民保護」の側面を強調し伝える文書が圧倒的に多いためである。また、既存の占領史研究において「証言」に焦点を当てた分析が行われなかったためでなかろうか。

米軍の公式文書と住民の証言を照らし合わせると、収容所の中の朝鮮人の存在も浮かび上がった。多くの朝鮮人にとってその場は、反日感情を表現できるナショナリズムの空間でもあった。このように、沖繩人、日本人、朝鮮人が「収容」された空間で芽生えた「戦後意識」とは、戦前と戦後の線引きがそもそも不可能な領域である。筆者は、沖繩から日韓関係を考察したときに、歴史の出来事を「記憶」として持ちつつ今を生きる人々の新たな「民主主義」を論じる認識論の発展につながると考える。